# 新・鬼師の世界
## ―伝統の変容：周縁の再中心化―

高　原　　隆

今年のアメリカフォークロア学会（American Folklore Society）、2020AFS の全米総会は、アメリカ合衆国内における COVID-19 伝染病の蔓延により、2020 年 7 月 1 日に実質上の中止が決定された。ただ開催地であったオクラホマ州タルサ（Tulsa）では、その地域を中心に内輪で学会を開くことになっている。オンラインによる参加もできるという。この連絡は 2020AFS における私の学会発表受諾の通知でもあった。しかし、オンラインによる参加は諸事情を鑑み、しないことに決めた。

さて今年の課題テーマは「Re-centering the periphery」であった。「周縁の再中心化」という意味になる。フォークロアが扱う対象は、その社会・文化において周縁ないし、周辺に位置することが比較的多い。そうした対象をいかに活性化させ、その社会の中心へ押し戻すことはその対象に関わる人々にとって重大な課題となっている。「鬼師の世界」も同様のことが近年、特に取り上げられているのは事実である。周縁の再中心化に関して「鬼師の世界」での動きとはいったい何があるのだろうか。今回は「鬼師の世界」の再中心化の動きに焦点を当てて、鬼師の世界を描いてみたい。

鬼師が周縁的な存在であることは異論の余地がない。まず、「鬼師」について我々、日本人がほとんど知らないことが挙げられる。「鬼師」について知っている人は極めて限られてくる。現在、鬼師が日本の中でも特に集中している愛知県高浜市、碧南市、およびその近郊は日本においては例外的な地域といえる。地域活性化の動きと連動して、鬼師の存在がこれらの町では市民に意識的に、政策的に、文化事業として周知される機会が多い。事実、様々なイベントや祭りに「鬼師」が組み込まれている。文字通り「周縁の再中心化」の動きといえる。ところが鬼師そのものの数は高浜市と碧南市を合わせても 40 名に満たない。日本の人口を 2020 年でおよそ 1 億 2 千万人だとしても、鬼師の存在自体が総人口に対して極めて少ないことは理解できると思う。当然のことながら、他の町の人々、つまり一般の日本人は日本人でありながら鬼師については全く知らない。いや、知らないどころか、「鬼師」という言葉自体を知らない。『大辞林』第四版（2019）にも、『広辞苑』第七版（2018）にも「鬼師」は出ていない。私自身も、この「鬼師の世界」の調査・研究を始めた 1998 年までは「鬼師」という言葉さえ知らなかった。まして「鬼師の世界」は全くの未知の世界のことで想像だにしなかった。この「鬼師」については鬼瓦職人として詳しく、直近では愛知大学総合郷土研究所紀要第 65 輯（しゅう）（2020）に紹介している。さらに詳しくは『鬼師の世界』（2017）、『鬼板師　日本の景観を創る人々』（2010）を参照してもら

うといい。

『鬼板師』(2010) でも述べたが、「鬼師」と対になる言葉がある。「鬼瓦」である。鬼師が自らの手とへらで作るものが鬼瓦である。「鬼師」は知られていないが、対になる「鬼瓦」を知らない日本人はいない。鬼瓦について詳しくは知らないかもしれないが、少なくとも「鬼瓦」という言葉は知っている。実際に日本生まれの、日本育ちの日本人なら、本人は意識はしないかもしれないが、自宅から外へ出れば必ず鬼瓦を目にするし、いつも目にしているのが鬼瓦なのである。ちなみに「鬼瓦」は『大辞林』第四版にも、『広辞苑』第七版にも出ている。『大辞林』は鬼瓦をやや専門的に説明しているが、『広辞苑』は一般的な説明となっている。ここでは『広辞苑』の一般的な説明を転記する。

［鬼瓦］①（古くは魔よけとして）屋根の棟の両端に用いる鬼の面にかたどった瓦。また同様のところに用いるものは鬼の面がなくてもいう。獅子口。
②いかつく醜い顔にたとえる語。
(2018：432)

このように「鬼瓦」は日本社会においては、中心的な存在と言っていいかと考えられる。周縁的な存在の「鬼師」と中心的な存在の「鬼瓦」は極めてユニークなコントラストをなしている。「私、作る人」である鬼師と、「私、作られるモノ」の鬼瓦という構造がそこに対をなして存在している。陰と陽が織りなす不思議な世界が鬼師 / 鬼瓦なのである。

ところが平成 7 年（1995）1 月 17 日午前 5 時 56 分、兵庫県を中心として甚大な被害を及ぼした阪神・淡路大震災が起きた。家屋の被害は全壊 10 万 4906 棟、半壊 14 万 4274 棟、一部破損 39 万 506 棟で、ほぼ約 64 万棟の家屋が何らかの地震被害にあっている。この大災害の様子がパノラマ的にテレビでヘリコプターによるライブ中継を通して延々と続き、ぱっと見、日本の家屋が黒い屋根瓦に押しつぶされたような光景として、地震の恐ろしさと重なり合って人々の心に強烈に印象付けられたのである。

この大地震を境にして、日本の伝統的ないぶし銀の黒い和瓦が日本社会から消え始めたのであった。つまり、人々は和瓦を持つ日本家屋から、和瓦を持たない洋風の一見モダンな、ハイカラな感じがするハウスメーカー各社が工場で製造する建物へとシフトし始めたのである。2020 年の現在、日本各地を旅するたびに、車から、電車から、新幹線から眺める街の風景は著しく洋風化してしまったことに気づく。逆に和瓦の新築家屋を見ると、驚きとともに新鮮ささえ感じるようになってしまった。この事は大きな流れとして、日本社会から鬼瓦が消えて行っていることを意味する。鬼瓦の周縁化が進行しているのである。事実、一般社会から鬼瓦が著しく減って来ている。一般家屋の新築の家に鬼瓦が載らなくなって来ているのだ。和瓦を持つ家が建たなくなって来ているのだ。忌々しき時代の到来である。「鬼師」のみならず、「鬼瓦」さえも周縁へと押しやられているわけである。日本社会から鬼瓦が消失することは広辞苑が言う魔よけとしての鬼瓦への意識が現代において著しく希薄になっている証拠だとも言えよう。こうした日本社会における「鬼師」及び「鬼瓦」の現状が存在する一方で、伝統的な鬼師の世界も大きく変容して来ている。

その大きな変容として挙げられるのが、鬼師のマスメディアへの登場である。実際にどのように鬼師がマスメディアに取り上げられているかを見てみたい。これまでは鬼師はともかく、鬼瓦は屋根の上で見かけるものであった。ところが現代では、人の目に触れることが極めてまれな鬼師が、そしてその鬼師が作る鬼瓦とともに、お茶の間や洋風な家の

リビングルームにあるテレビに登場しているのである。そこでは何某(なにがし)かの心理的な葛藤が起きているものと思われる。「なにこれ！？」といった驚きを伴う未知との遭遇的出来事である。

## 鬼亮　梶川亮治

梶川亮治は日本の鬼師を代表する人物であり、マスメディアへの登場の件については2019年5月24日にインタビューした際にすでに聞いており、今回のテーマ「周縁の再中心化」を構想した時の重要なヒントになっている。この時のインタビューをもとに、2020年8月13日、コロナ禍の中をあえて岐阜県恵那市から愛知県碧南市へと訪れることにした。この時、県境のトンネル付近で、電光掲示板が「車での他県への移動は控えましょう」と橙色の点滅をしながら大きく謳(うた)っているのが印象に残っている。運転していた車はスズキの軽トラック、キャリーであった。恵那市の山中、飯地村では軽トラは必需品になっている。

さて、亮治のテレビへの出演は平成5年(1993)が初めてであった。その番組はNHKの「新日本紀行」で全国放映であった。亮治は次のように語っている。(図1)

はっきり自分の記憶の中にありませんけれど、確かね、これはね、10日間ぐらい掛かって撮影したものだと思います。で、えー、時間的には30分（の番組）だったのですが、そのー、鬼瓦を作るところもそうでしたが、そのー、何ていうのかな…。「鬼瓦を屋根に載せるところまで映したい」ということで、あの、岡崎市内の、あのー、鬼を載せるところがありましてね。それも一緒に映すということで、ただ岡崎までやって来て撮影したという記憶がございますが、それが「新日本紀行」だったと思います。

10日間かけて撮影し、鬼瓦を作るとこ

図1　阿吽の鬼面　平成2年（1990）梶川亮治作　現在82歳

ろと、鬼瓦を屋根に載せるところが中心のかなり密度の濃い内容のものを30分の番組に編集したものであった。鬼師が鬼瓦を作る仕事場と鬼瓦が実際に屋根に載る様子が全国に流されたことになる。放送が終わって、反応なり手ごたえはあったかと亮治に尋ねてみた。

手ごたえというより、何か見るのが怖かった。(笑い)初めてのことだからね。何てしゃべっているのかって、自分自身怖かった。話しているのが。それとマスメディアでこうやって話を採っていくちゅうことは、いかに自分が裏付けをきっちりとって話をしないといけないんだなあちうことがよーく分かりました。

全国から反応というのはなかったかと聞くと、亮治は次のように話すのであった。

何かあったか…。そういう話は聞いておりませんが…。「悪かった」とも、「何とも」聞いておりません。

平成15年（2003）には三重県伊勢市教育委員会より、職人の技をテレビで市民や子供の教育のために見せるという企画があり、「職人10職」の中の鬼瓦で出演し、話をし、鬼瓦作りを披露している。このテレビ放映の取材がいきなり来たわけではない。伊勢神宮内宮前にある「おかげ横丁」が平成5年（1993）に伊勢路の建築物が移築、再現されて、街並みの復興の目玉として開業したころから直接に亮治は関わって来ていた。その中心人物が（株）赤福の社長であった。亮治は次のように話してくれた。

赤福さんが言われるのは、私たちが伊勢作り、伊勢の町家づくりを残さないと無くなってしまうと。ということで、昔の通りのやり方で店を作ったのね。だから、こう、やっぱりものすごく手が込んでいるんです。屋根までもすごくこだわって作っていただいたんですね。

その時に赤福さんが言われたことは、「こういう町家づくりを作ると、いろんな職人さんというのは、めったにない仕事だもんで、なんでも高くつけてくるんだ」と。ほうすると、「私たちは、こう、そういうものは長く続けることができん」と。「だから協力してくれ」と言われたのでね…。で、私自身も直接、赤福さんに売る形になるものでね、できるだけ協力してもらうという形で今があるんですけれど。

やっぱり、昔のいいものを残そうというのはね、あの一、これは私も同じ気持ちですからね。赤福さんに共鳴した感じね。うーん。「できるだけ私も、できる力で、一所懸命やらしてもらいますよ」ということで。今も、まだ、仕事が続いているんですけど。

亮治は伊勢神宮内宮前から五十鈴川に挟まれた「おかげ横丁」の甍の波を飾る様々な鬼瓦を長年にわたって手掛けて来ているのであった。こうした実績の上での「職人10職」なのである。そして伊勢の伝統技術を伊勢市が市民にテレビで具体的に知らせたのであった。やはり一番大切なのはその土地の人々がその伝統を知り、誇りに思い、初めて伝統に命が宿るのである。市はメディアに着目したともいえる。テレビ放映に対する反応について亮治は次のように言っている。

伊勢の方、見てみますからね。だからお蔭さんで、あの一、三重県のお客さんが増えましたね。

やっぱりね、あの一、今まで知らなかった

の。私たちみたいな小さな商売ですからね。零細だからねえ。あのー、知らないんですよ。また、宣伝もしないしね。ほだけど、(おかげ横丁で）使ってもらうことで、また、製品（鬼瓦）を見てもらうことで、やっぱりアピールすることがあったんだわなあ。

実際に私自身が鬼瓦も、鬼師も知らなかった。知らなかったら、たとえいくら伝統のあるものでも、その人にとっては無いと同じである。多くの伊勢の人はテレビ放映を通して知り、そして実際に鬼の載っているおかげ横丁に来て、伊勢の伝統を直に知ったのである。さらに興味深い話を亮治は話してくれた。伊勢と三州瓦とのつながりである。

伊勢の、あのー、松坂とかね、名張とかね、あの辺はまだ昔の街並みも残ってますしね。また、昔は名張ちうたら、大きな産地だったんですね、瓦の。私の親(梶川賢一)、…親の代ぐらいまでは、向こうに出張して仕事をやるちゅうことがありましたからねえ。私自身、生まれた時に、おやじが出稼ぎに行っておりましたからねえ。おやじの留守に私は生まれたんですよ。(笑い）だから伊勢はとても身近に感じますね。

これも縁ですね。本当に縁ですね。だから伊勢の町家づくりの家の鬼瓦というものは、ものすごい特徴があって、「ああ、なるほど」ちゅうようなもんが載っていますよね。いいものが載ってます、はい。

「昔から高浜というか、三河の鬼瓦と伊勢はつながりがあったわけですか」と亮治に聞くと、すぐに続けて答えるだった。

そう、そう、そう。あのー、鳥羽へはね、毎日、あの、伊勢通いの船が出ていたからね。船便というものはものすごい良かったですよ。

平成１９年（2003）には、DVD『鬼瓦をつくる』が制作されている。三州鬼瓦の制作過程を後世に残すという意味も含めて、５人の鬼師がそれぞれ「影盛」、「経の巻」、「鬼面」、「鯱」、「獅子」を一人一つずつ担当している。亮治がその中でもメインに当たる鬼面つまり一般の人が鬼瓦としてイメージする鬼の顔をした鬼瓦を制作している。文化庁の支援で、高浜市伝統文化推進事業の一環として、高浜市かわら美術館と共同で映像化している。亮治はこの件については次のように話してくれた。

三河で鬼瓦の手作りの鬼瓦をビデオを見て出来るような形の中で残したいということを言われたのね。「あんたが死んでも出来るようにしといてくれ」という（笑い）言い方だったよね。頭にカチンと来ましたけどね。(大笑い)「その言い方はなかろう」と思いましたが、それでも一応素人の人が見てね、わかるような形の中で、あの、鬼瓦を作らせてもらいました。

亮治はすでに、平成５年、平成15年に鬼瓦の制作を一部公開してテレビで放映されているが、平成19年のこの『鬼瓦をつくる』で、自らの鬼面の全制作過程を公にし、映像として誰もが見れる形にしたのである。事実上、亮治は手の内をすべて公開した形になっているので、ここに亮治のその気持ちを記録に留めたい。

若い時はね、作るときはあまり見せたくないちゅうのはあるよね。確かに。あのー、極秘みたいなようなところはあるよね。ほだけどねー、ある一定の年齢来るとねー、そうではないのね。やっぱり作る過程を見てもらいたい。

作る過程、どの過程でもね、きれいに見えないと。どの写真見ても美しく見えないといいものができない。あとで仕上げるであとが良くなるという、そういうもんではない。やっぱりその作る過程すべて、あのー、何ていうのかな、あの、一連の動作の中で、あのー、美を追求するちゅうのは、それは当然あるんだと思う。

平成20年（2004）にはNHKの「匠」という番組に出演している。いろいろな匠が登場するもので、その中の鬼瓦を作る職人、鬼師として鬼瓦を作るところを主に写したものという。これについては亮治は番組に出た理由を述べている。

私は商売が鬼瓦屋だもんで、鬼瓦を手で、あの、巻き上げて作ってくちゅうのはねえ、本当に少ないんじゃんね。あのー、今のわし方の年代ちゅうのは、ちょうど端境期ちゅうか、型に移行してからの鬼師だからね。どうしても石膏型とか、プレスの鬼とか、あの、機械化されたものが主になるのね。手作りやるの本当に珍しかったの。だから余計にそういうものにNHKがこだわったちゅうことはあるんじゃないでしょうか。手で作るちゅうね。

亮治は文字通り手作りにこだわった、手作り一本に絞って鬼瓦を制作してきた鬼師なのである。そして常日頃から「親方とか師匠とかの真似をしているだけではダメである」と口癖のように言う人でもある。

自分の表現したいものを鬼面を通して作るんだと。「自分の鬼瓦はこうだ」という確信を持ちながら、あの、作っていかないといいものに到達することはない。真似をしてるだと、ただの真似なんですね。それから発展することがないんですね。

で、自分の理想としたものを作ろうとすると、それに突っ込んでいくとね、いろいろとアイデアが湧いて来てねえ。ほのー、究極、もう、これだ、「自分の作る鬼面はこれだ」ちう、一つのなんちゅうのかな、あの、うーん、中心となるものが出来るような気がします。

これはやっぱり、あくまで自分で創造しないと。うーん。ただ、あの、真似で作るだけでなくて、新しいものに挑戦する気持ちを常に持ってないとそういうものに到達することはないんじゃないのかなあ。…というふうに感じましたね。

NHKの「匠」はこの亮治の鬼瓦に対する姿勢を一般の人々に、そしてほかの鬼師の人たちに届けたのである。

平成23年（2011）にはキャッチネットワークという地元、愛知県のテレビ局が『西三河の肖像　三州瓦いにしえから未来へつなぐ』という番組を制作している。この中で亮治はやはり鬼瓦の制作を披露している。

結構長い番組だったもんねえ。ほんでねー、あのー、やっぱり「三日で完成させて、焼き上げるところまで写さなければいけない」ちゅうことを言ったのね。そうすると無理な話でね。前もってね、あのー、ひと月、ふた月前ぐらいから話があってね、で、いくつか作っておいたり、それから作ったやつを先に焼いておいたり、いろいろな手法をしてね、三日の中で取材ができるように。

キャッチもまだはじめの頃だったでねえ。ほだもんで、とても、あのー、これで私は手作りの鬼瓦をやってるちゅうのが碧南市

中に知れ渡ったちゅうか…。それは毎日、一日三回ぐらい流すわけでしょ。ほんだで、どこ行っても私の名前がこの時出た感じがする。

これだけじゃなかったもんで、その前に出てるもんで、ほんと「テレビばっか出とるんだね」ちゅうようなことはよく言われたね。

亮治は町の人からこのように言われるだけでなく、なんと次の取材に来たテレビ局の人から「あんたはテレビずれしとるね」とまで言われている。それほど亮治はテレビ取材を受け、実際にテレビに出るようになったのであった。

平成 27 年（2015）には文化庁による「平成 27 年度文化遺産を生かした地域活性化事業」として宮崎県延岡市に 10 日間にわたって鬼瓦の講演と鬼瓦の制作の一般公開並びにそのビデオ化に出掛けている。その DVD のタイトルは『鬼瓦制作一般公開と実技指導』となっている。

向こうの陶芸家の方やら、鬼師の方やら、いっぱい見えてね。「あれが鬼師だ！」ちゅうて。（笑い）…て言われましたがね。（笑い）私は自分のやることしかやらないから、まあ何よりも「見てくれ」ちゅうて、粘土で作らせていただきましたけど。

始め、「鬼瓦の講演してくれ」と。それから「鬼瓦を作るところを見しとくれ」と。ほれから、次の５日間で「能面を作るところを指導してほしい」とのことで作らせてもらったんですね。生徒さん、二、三十人おったと思う。

この延岡市の 10 日間にわたる亮治の鬼師としての鬼瓦の実演は周縁としての鬼師と鬼瓦が突如、異空間より「鬼」が現れたような衝撃があったものと推測される。現代の名工が鬼面と能面（般若）を公衆の面前で粘土の塊からそれぞれ僅か 2、3 時間で魔法のように鬼と般若を作り上げるのである。「オーっ」と響動（どよ）めきの声が上がる。それほどの迫力を亮治の鬼は持っている。

平成 28 年（2016）には、亮治が愛知県安城市教育委員会に招かれて、地域の伝統産業の担い手として、鬼瓦を作るところを披露している。亮治は二つの町の繋がりを伝統産業という視点から話してくれるのであった。

三州瓦のもとは安城の桜井なんです。そこから始まってる。粘土も桜井から出るんです。粘土屋さんも、うちも、商売始めた時からずーっと桜井の粘土屋さんに粘土持って来てもらって作ってたんですね。はい。で、あのー、この話が来て、うーん…。三州の瓦の元祖というのかなあ、岩瀬さんちゅう方が見えて、この方が一番年代的には古いんじゃないかなあ。

確かにいい粘土が、あの、鬼が、瓦に関していい粘土が出たんですね、安城というのは。私の方、碧南になると、あのー、もう少し、矢作川でも川口になってきますんで、粘土そのものが、こう、さくいんですね。瓦に向かない。耐火度が低い粘土。ということは植木鉢とか、土器、コンロとか練炭火鉢とか、そういったものを作る粘土しか出なかった。ほだけど、桜井ちゅうのは、その粘土だけで瓦を作る最適の粘土が出たんですね。西尾だとか、桜井ちゅうのはそういう産地だったんですね。

安城市の場合は、伊勢市の場合とよく似ているケースで、それぞれの市の教育委員会が

地元の伝統産業を市民にメディアを通して伝えていく企画である。安城市は地場産業の瓦を介して高浜市と碧南市とに古くから繋がっているところも伊勢市の場合と似ている。伊勢、高浜、碧南、安城といった地域は一つの共通の広域瓦生産文化圏といえよう。

あのー、始めの組合作った時は、確か碧海（現在の安城市）でみんな、桜井も入ってたんだと思いますけどね。入ってたというより、あっちの方が主だったじゃないのかなと思いますけれど。その後、高浜の方が一大産地になって大きくなった。分派したんだけど、確かそういうふうな流れだったと思います。

事実、三州瓦の元祖といわれる岩瀬家は碧海郡桜井町にある。現在の安城市のことである。「三州瓦五百年説」によると、岩瀬家17代目岩瀬善次郎が寛正元年（1460）室町時代に瓦製造を始めたと伝えられる。（高原2010:10）やはり、地元に瓦産業の伝統がある、またはあった地域は亮治のメディア体験によると、テレビへの鬼師の登場と鬼瓦の映像の放映は、瓦産業の伝統がない地域と比べると、反響に大きな違いがあるようである。NHKによる「新日本紀行」や、次に紹介する「日本風土記」はそれぞれ30分の鬼師／鬼瓦のドキュメンタリー番組であった。亮治はそのモデルとして取材を受け、放映されたわけであるが、一般からの反応は「なかった」という。ところが、伊勢市、安城市、そして「日本風土記」の次に亮治が関わった鹿児島市は、すべて地元の教育委員会が主催になっている。すると、地元民との熱のこもった関わりが生じている。亮治自身が一般の人からの反響を実感するのである。地域の伝統文化がメディアを通して直に一般の人々の生活の中に現れ、人々の心を揺さぶるのだ。メディアが鏡となり、自らを映し出し、人々は己に気づくのかもしれない。「周縁の再中心化」現象である。

平成29年（2017）は大きなテレビ出演が二回ある。まずNHKの「日本風土記」で、30分の番組があった。亮治の話でその大枠が見える。

日本風土記の時はねえ、三日間ぐらい見えてね。えー、えー。いろいろな昔の瓦を作ってた跡とかね。うーん。それから、私の作った鬼瓦をこの近くでね、ある所へご案内して、撮影したちゅうこともありますが、はい。そこで、「鬼瓦を作るところも見してほしい」ということで、鬼瓦を作るところも見せてね。はい。三日の中で、確か、完成できるように作ったように思いますけど。

日本の瓦、鬼瓦の風土記として令和2年、82歳の亮治は次のように語っている。

平成29年ちゅうと本当、ほん、2、3年前の話じゃんね。その頃になるとね、瓦屋さんがどんどんなくなって来て、もう、瓦師も、どんどん少なくなって来る。うーん。ほんでね、少なくなって、瓦の産地を撮影しようと思ってもね、その痕跡すら、もうなくなってしまったような時代ね。

瓦屋さんはほとんど淘汰されて、もうトンネル窯が銀色の場合で言うと、三河で三軒か、四軒残っただけ。で、鬼瓦も本当に特注の手作りの鬼瓦やるところは本当に少なくなった。鬼瓦そのものを、結果的にはね、自分たちで壊したんですね。ということはね、機械化が進むことで、石膏やらなんやらで、あのー、型押しのものを作ると、ほんと、鬼瓦を載せる意味がなくなっちゃうんです。その時は儲かったように思うかも

しれませんけれど、ほの、うーん、この、同じものがどこにでも載ってるというんでは、鬼瓦のもつ意味が無くなっちゃうのね。

鬼瓦ちゅうのは家の象徴だから、やっぱりそこに意味を持たせないと。あの、鬼瓦の価値はなくなるんだと思う。うーん。ヨーロッパ行っても鬼瓦っていうものは、棟の留めはありますけれど、日本のようにそういう形にこだわって、載せるところは日本ぐらいしかないです。あのー、中国やなんかだったら、ほとんどもう架空の動物が載っとる。それも紫禁城のようなね。ああいう宮廷やなんかを対象としてますからね。一般の民家ではそういう鬼瓦が載るちゅうことはまずありませんから。

テレビ放映されての具体的な反応については亮治は次のように語っている。

「見たよ」っという話は聞きますね。うーん。あと、「地元じゃ、あなた有名なんだねえ」って言われたこともあります。けれど、まあ、それだけ数少ないちゅうことでしょうけどね。

NHK 自体に連絡が一般の視聴者から入ることはないのかと尋ねてみた。

ないです。ないです。

平成 29 年（2017）には、鬼亮は鹿児島城御楼門（重要文化財）の鬼瓦を復元することになった。その復元する鬼瓦の制作過程を鹿児島県教育委員会が視察に愛知県碧南市にある鬼亮を訪れ、制作の様子を鹿児島読売テレビが取材したのである。

名古屋城でもそうでしょう。名古屋城はあって、御殿は下の方にあるでしょう。お城はこの鹿児島の場合はないんだって。ほだけど、門を「御楼門」っていう門をね、こん時、作るんだっちゅう話だったのね。ほの鬼がね、二尺のものが載ってたちゅうのね。ほとね、二尺ちゅうと 60cm だよね。東京の桜田門、あの鬼が尺３寸だわ。あんだけ大きな門でも尺３寸。お城の門で二尺の載る鬼、門はありません。日本一ですよ。

ほんで、「二尺だ、二尺だ」ちゅうのね。ほだけど「二尺の鬼面ちゅうのは、お寺で言えばそんな大きなお寺じゃないよ」って私言ってしまったんです。これはやはり良くなかったですね。むこうの顔を立てて、「すごいもんだ」って言ってあげにゃならんかったのかなあという後悔は今でもしてます。（大笑い）

ただ、亮治はこの御楼門の鬼瓦に対して鋭い指摘をしている。やはり亮治の長年の鬼瓦制作に携わる経験と知識と深い洞察力である。つまり御楼門とその復元を依頼された鬼瓦の繋がりに対する素朴な疑問であった。

お城を造られる土台のところから出てきた鬼瓦ということでね、復元ちゅうことでね。ほんで、それが、また、重文に指定されたということで、とても貴重に、貴重がられたちゅうのか…。それに、それが実際に御楼門に使ってあったかどうかという証拠も何もない。ただ、そこから出て来たということで、それを踏襲してね、復元してくれちゅうことで、作らせていただきましたけどね。

鹿児島読売テレビは県教育委員会が鬼亮の工場へ視察に来る一日前から入り、撮影に携わったという。テレビで地元鹿児島で、鬼瓦の復元制作の様子が放映されたことへの反響

について亮治は次のように話した。

すごく評判になったという話は聞いております。御楼門の鬼瓦でかいたちゅうことで。あの、作るところを見せましたからね。だで、あの、粘土で巻き上げて作るところを見せたから、余計に印象深かったじゃないのかな。

ここでもやはり地元民の反響の大きさがうかがえる。その土地の人々と、その土地が持つ代々の伝統文化・技術がいったんは諸般の理由で途切れてしまうのだが、片や鬼瓦の復元を通して、地元の伝統の復興がなされ、それとともに復元に携わった鬼師が復元の制作をする様と、復元される鬼瓦が人々にメディアによって伝えられると、人々の心に土地の伝統文化に対する誇りが蘇るのである。「周縁の再中心化」現象がここでも起きている。

一方、NHK による全国放送の番組の場合は「放送に対する反響はない」と亮治は言っている。「新日本紀行」にしろ、「日本風土記」にしろ、どちらも定評のある NHK の番組である。しかし、視聴者からの反応は「なし」である。地元中心の取材によるドキュメンタリー番組と好対照をなしている。その原因の一つは、視聴者とメディアによる番組の間をつなぐ伝統文化・産業・技術の有無である。それがある場合は人々は心を強く揺さぶられるのだ。地元の伝統に対する誇りや愛着さえ生じてくる。無い場合はそうした反応は起きにくい。これは鬼師と鬼瓦が日本社会の中で、周縁へ追いやられている現象であるとも取れる。そして、NHK による「鬼師と鬼瓦」の全国放送は、それ自体が周縁の再中心化の現われでもある。鬼瓦がない、ハウスメーカー製の洋風な家のリビングルームに、メディアを通して「鬼師と鬼瓦」が現れるのである。自らを省みる場になることは確かであろう。消えた伝統の再中心化の機会になる可能性は否定できない。亮治にテレビに出演することに対する考えを尋ねてみた。

うーん。これはねえ、あのー、一つは絶好のチャンスだと。鬼瓦を知っていただくね、絶好のチャンスだと思います。

これは何て言うのかな、あのー、この地方だけではなく、全国にね、こういうふうなものを作る場所があるんだよというのを見ていただくちゅうのはね。この産地にとっても、大きなプラスになるんだと思います。また、知ってもらいたいしね。

うーん。鬼瓦の持つ本来の意味みたいなものがありますのでね。そういうものも知っていただきないね。

## 鬼十　服部秋彦

鬼板屋、鬼十は私がよく訪れる鬼板屋の一つである。鬼十の三代目服部秋彦から鬼師の世界とメディアの関係について様々なことを教えてもらった。その成果は昨年（2019）に「新・鬼師の世界　―　伝統の変容：現代技術と伝統技術のインターフェイス」（高原 2019）としてまとめている。その時に語り尽くしていなかったものがマスメディアの話であった。秋彦も鬼師の中ではマスメディアからの取材を多く受けている人物の一人なのである。服部秋彦とメディアとの関係について見てみたい。最初にメディアからの取材を受けたのは 2013 年の夏に、AXIS という工業デザインの専門誌であった。（図 2）

2013 年、ちょっと 1、2 年ぐらい前に、鬼瓦を他の異業種の人とコラボ出来たらいいなと思って、日本グラフィックデザイナー協会だとか、日本興業デザイナー協会の人たちといろいろコラボして、いろいろ

図２　インタビューを終えてリラックスする服部秋彦
（鬼十）2020 年 8 月 13 日

事業やって来て、その中でたまたま、その一、工業デザインの方の関係ビルが東京の六本木にありまして、そこに AXIS という雑誌が、その編集の会社が入ってて、そこの、ちょっと目に留まって、「是非一回、鬼瓦作るの撮らしてくれないか」ということで。この本の中で、日本の伝統工芸的なものを毎回、毎回取り上げているコーナーがあって、そこの部分で、まあ、あの、取り上げてもらいました。

こちらへ（高浜）来て、僕らの、その、仲間、当時、まあ、今もですけど、やってる山下さん（鬼敦　山下敦）だとか、春日さん（鬼英　春日英紀）。その、まあ、チームで一応取材を受けて、メインで取り上げてもらったのは、その、作る様子は山下さん。あと窯から出したり入れたりとか、そういうので僕と春日さんが紹介されたということで…。

まあ、知ってるその業界の人に言わせると、「エッ、AXIS に載ったの！」って。そうやって言われたので、「あっ、そうなんですか」っていう感じで、…まあ、そのへんを皮切りに、ま、いろいろと色気出して来ちゃって始まりましたね。

秋彦は鬼師仲間の山下敦と春日英紀と「チームぼたん」という鬼師の世界では他に

はない、鬼師グループを編成しており、注文物件が大きい場合、チームぼたんとして一緒に鬼瓦を制作している。そして、秋彦はチームぼたんの中ではリーダーと呼ばれ、注文物件の受注、折衝担当としてチームをまとめている。山下敦と春日英紀についてはすでに『鬼師の世界』でそれぞれ単独の章として紹介している。(高原 2017)

2013 年の夏は、秋彦はメディアからの取材で忙しかった。AXIS で雑誌に取り上げられた後は、なんと NHK の朝のワイドショー「あさイチ」のコーナー「ピカピカ JAPAN」で、生中継されている。この時に秋彦はメディアの影響力の大きさに気づかされたという。

報道というか、メディアが、特にテレビが。特にテレビ、テレビはすごいなと思ったのは、あの「あさイチ」っていう、あの、NHK の朝のワイドショーみたいなバラエティーの番組の、たまたま生中継がここへ入って、で「ピカピカ JAPAN」っていうそういうコーナーがあって、そんなかで、鬼瓦、家を守る鬼瓦を愛知県高浜市で作ってますっていうので、「たまたま、今、東京の方の、市川の方のお寺の鬼を修復してます」と言って、そういうくだりで入って来て、その時にはもう、ある程度仕込みでその鬼瓦の組合の、その、青年部というか、若鬼士会の皆さんもいろんなグッズを用意して。もう、NHK からの仕込みでね。(笑い)

「ついでに紹介したいものが何かあったらやってください」と。まあ、一通り、その、みんなが作ってる所だとか、そういうのを、どうかなあ、その、中継時間としては 5、6 分だったと思うんだけども…。で、まあ、向こうからいろいろ突っ込まれて、あの、スタジオの方からいろんなこと言って、こういう、答えたりとか、そんなんで…。短いコーナーなんだけど、で、それが終わって、NHK が終わったと同時ぐらいに、もう、うちの電話がガンガン鳴っちゃって…。いろんなところから、「今、テレビ見たんですけど、あれは買えますか」とか、そういうのがあって、その日は結構、午後 2 時ぐらいまで、「あさイチ」の収録が終わってね。

なぜ NHK の朝の番組でこんなことになったかについて、秋彦が話してくれた。「なぜ電話が視聴者から鬼十へ直接つながったのか」とたずねたのだ。しかもわずか 5、6 分余りの生中継番組においてである。

普通はあんまり、そう、僕ら紹介するときは、高浜市の鬼瓦職人、服部さんとか、服部秋彦さんとか…。屋号は絶対出んのだけど…。この「あさイチ」はそん時は紹介したんですよ。鬼十と出て、電話番号もつけて。で、あとは、その、瓦組合が何番とか…。で、テロップ出して紹介したもんで…。

しかも、単なる注文だけでなく、他の質問もいろいろ来ていた。「鬼瓦、工場で焼いているんですよね」。「どうやって焼いているんですか」。

この NHK の「あさイチ」の生放送のケースは極めて示唆に富んだ話といえる。何しろ全国版の NHK のテレビ放送である。梶川亮治が登場した 30 分の定評のあるドキュメンタリー番組では、まったく視聴者からの反応はなかった。もちろん亮治の個人的な知人からの反応は別の話ではあるが。「新日本紀行」や「日本風土記」と「あさイチ」との違いは、個人情報の有無が決定的な要因であることがわかる。秋彦ははっきりと次のようにメディアについて言っている。

やっぱり、あのー、メディアは侮れんですよ。

秋彦がテレビの次に出演したのが、2015年の中京テレビ、日曜日午前中にあるバラエティー番組「前略大とくさん」であった。「大とくさん」というのは、ゆるキャラで、面白おかしく話を進めていくショーである。その中に「教えて、大とくさん」というコーナーがあり、そのコーナーに取り上げられたのだ。内容は鬼師が自分で自分の作った鬼瓦を見に行くという企画だったという。

仲間の数名呼んで、四人ぐらいいたのかな。いろんな、こう、ああしたい、こうしたいという希望を出して。僕のはたまたま採択されなかったんだけど…。えー、丸市の加藤君（加藤佳敬）が自分の作った鴟尾、シビってお寺の屋根に載るやつね。あれの、載ってるとこ、見てみたいという話が取り上げられた。

佳敬の案は採択後、ストーリーが作られて、「教えて大とくさん」に登場したのである。番組の制作の裏話であり、同時に鬼瓦がどういうふうに鬼板屋から一般家屋の屋根に上がり、人々の目に触れるのかがわかるところが重要である。

うちが（鬼十）加藤さんとこ（丸市）に、金焼きの鴟尾を発注して、それを加藤さんが、その、載っているお寺というのが、まだわかんなくて。その、関わった瓦屋さんに、こう、問合せして、で、工務店に聞いて。で、現場がわかって、その寺さんに許可を取って、そこまで見に行くという話なんだけど…。

秋彦のテレビ出演はこの時が初めてだと思ったが、そうではなく、秋彦はすでにいろいろとテレビ関係の取材を受けていた。

あのー、割と向こう、プロデューサー（中京テレビ）から「服部さん、結構手馴れてますねえ」って言われちゃって。過去でも、いろいろちょっと出の、そういういろんな地元のそういうテレビだとか、いろんな民放の、たとえばニュースのスポットで流すような…。そうゆうようなの、ちょっと取材受けてたんで…

こういった話の流れから次に移ったテレビ関係の話がキャッチネットワークや、様々な民放各社からの取材についてであった。ただ、鬼師（鬼十）としてというより、鬼師や鬼瓦をテーマにした地元で行われるイベントの取材である。

15年ほど前から地元でやってる鬼みち祭りであるとか、それから飾り瓦コンクールという、あの、そういうイベントがあって、ま、それで最後の方は代表させてもらっとったんで…。で、鬼みち祭りは地元の小学生に、えー、授業のなかで、鬼師が出前で何人かいて、えー、子供たちに指導して、ランプシェード作ってもらう。それが鬼みち祭りの当日、1000個、1500個ぐらい高浜市内の沿道に飾られるんですけど。で、それを作るので、ずっとお手伝いして来て…。

で、ま、地元の、要するにケーブルテレビだとか、あのー、地元のNHKも、東海テレビ、CBC、名古屋テレビ、中京テレビとか、ま、その辺が事あるごとに足を運んで取材してくれてPRしてくれたという…。

飾り瓦コンクールも同様。これは、あのー、まあ、鬼師さんといわれるプロの人から一般の人、大学生なんかを広く公募して、あのー、瓦素材のオブジェ作ってもらって、

毎年３月にそれを一挙にかわら美術館で展示するという、そういう展示会があって、…。それはどっちかというとキャッチさん（キャッチネットワーク）がメインかな。地元の（ケーブルテレビ）。律儀に毎年取材に来てくれましてね。

飾り瓦コンクールは去年（2019）で休憩になったという。それまで12回、12年間続いていたイベントである。どういったイベントかを秋彦は話してくれた。

地元の瓦屋さん、鬼屋さん、そういう関係の人。ま、要するにプロといわれる人たちの、ま、そういう技術を競って、「鬼瓦じゃないもの」といっても鬼瓦に近いようなもんだけどねえ。で、そういうものを作って…。で、あとは世間一般と、あと、愛知県内の美術系の大学、県美大、あー、県芸か…。それから、えーっと、どこだ、…名古屋芸術大学と、名古屋創造大学。で、あと、後半、僕が、そのー、委員長務めるようになってからは愛教大の、そういう美術の方の関係の人たちにも入ってもらって、学生さんからは結構毎年百点ぐらいのそういう作品展示をさしてもらって。でも、学生さんがいたからやれたという部分で…。総合点数がいつも130点ぐらいだったから…。毎回、毎回、鬼師さんだと見飽きちゃうんで…。

秋彦は飾り瓦コンクールに関連して、さらに興味深い話をしてくれた。鬼師が大学に出向き、飾り瓦コンクールの作品作り指導に取り組んでいるというのである。これは文字通りの「周縁の再中心化」の動きといえよう。

瓦粘土、こちらから粘土供給して、で向こうで作ったり。あとは、まあ、あの、愛教大さん（愛知教育大学）なんかは、逆に、もう、こちらから…、前にも川崎さん（鬼師、川崎忠之）と僕で一緒に行って、ちょっと技術指導したりだとか。で、向こうは完全、授業の中のカリキュラムに組み込んでくれたんで、毎年ずっとやってたんですけど…。今年は飾り瓦コンクール終わってから、もう…。今年(2020)は(新型コロナウィルスの流行のため)リモートじゃ作れないんで、ちょっと話はお流れになっちゃっています。

2016年1月にはNHK名古屋放送局によって「知恩院の鬼瓦復元」がドキュメンタリーとして放送されている。ところが最初、東海地方のNHK名古屋テレビ局が取材、編集して一般にテレビ放送されたのであるが、なんとその内容と映像の質の高さをNHK内で評価され、全国版になり、改めて全国へ放映されることになった。しかし、この「知恩院の鬼瓦復元」はここで終わりではなかった。なんとNHK WORLDへ取り上げられたのであった。これは日本全国版どころか、世界発信版のニュースである。もちろん英語に吹き替えられている。この時Atsushi Yamashita（山下敦）の名前が何度も、何度も、世界へ鳴り響いたのである。英語がわからない日本人にはAtsushi Yamashitaの名前が耳に木霊したものと思われる。この知恩院のドキュメンタリーを制作したのが当時NHKに入社して2年目の野村祐介であった。鬼師の世界へ強力な助っ人が現れたのだ。秋彦は知恩院の鬼瓦の復元の取材の様子をこう語っている。（図3）

国宝の御影堂の復元という事なんで…。で、たまたま、その時、京都に出入りしている、えー、同業者の萩原さん（萩原製陶所、萩原尚）、いつもお世話になっとる萩原さんが、あの、向こうの（京都）瓦屋さんと繋がりがあって、萩原さん、今でもたくさんそういう文化財とか、まあ、重文のね、京

図３「知恩院の鬼瓦復元」を撮影中の野村祐介
（2015 年 12 月 1 日）

都の物件たくさんやってて…。で、まあ、萩原さんの方へ声がかかって、えー、「三州で国宝の復元やるか」という話になって、で、当然、萩原さん一人でやれない。で、ま、その一、鬼瓦組合入ってる、ま、何とか、萩原さんが頼みやすいところ、鬼師さん、6、7名に声がかかってみんなで復元したという事なんですけど。

以上のような次第で仕事は始まった。普通は仕事をする時は外部に情報を漏らすことはない。ところが秋彦はNHKの人から「何か面白いことはないですか」と聞かれた時、「三州で国宝の復元が始まりますよ」とつい口を滑らせたという。偶然、チームぼたんはリーダー（秋彦）の工場で三人そろって三つ、鬼を作ることになり、そこへNHKのカメラマンが取材を申し入れたのである。

まあ、NHKのカメラマン（野村祐介）がなんと一か月ちょっと、朝８時ぐらいに来て、夜、僕ら仕事終わるまでずーっと、40日間ぐらい張り付きで…。（笑い）NHKは経費あるなあと思ったけど。

ま、すごい一所懸命で、あの、すごい勉強熱心で、鬼のこともいろいろ聞いて来たし。で、入って、入社２年目で、自分のこういうのやらしてもらって。ということで、まー、一所懸命作ってくれて…。

しかも、40日間ただ張り付きで取材していただけではなかった。その過程を逐一NHKニュースとして流していたのだ。

事有る毎に、NHKの夕方のニュースだとか、お盆だとか、いろんなところで製作の段階、段階、ちょっとずつ流してくれたりだとか…。

そして最後に短編でまとめたのが、『知恩院の鬼瓦復元』だった。そして先に話したように、地方版から全国版、そしてNHKワールドへと世界を鬼師と鬼瓦は駆け巡ったことになる。

翌2017年9月には知恩院つながりで、NHK「美の壺」から取材を受け、同年12月にテレビ放映されている。テーマは『鬼』でその中の一つとして、「鬼瓦」にも焦点が当てられたのだ。

鬼瓦という鬼をテーマに取り上げるということで、その完全、丸まる一本が僕らの鬼瓦のことじゃなくて、全国のいろいろな鬼を取り上げて、冒頭の10分位を、結論言っちゃうと最終的に編集して、それぐらいの長さになったんですけど。

内容としては知恩院の御影堂の鬼瓦を復元制作して、で、まあ、それ、現場まで行って、その、古い鬼瓦と新しい鬼瓦を見比べながらいろいろ、こう、話をして、鬼とは、鬼瓦とは何ぞやという部分を、こう上手にまとめてくれたあれで、萩原さん（萩原尚）が冒頭、鬼のことをちょっと説明して、えー、一緒に僕のほかにも数名行ったんですけど、萩原さんがメイン。そして、僕が、えー、一言、二言しゃべったのが、バンと出て、瞬撮で終わりましたけど。（笑い）

「美の壺」は司会が俳優の草刈正雄で、番組として定評がある。もちろん秋彦はほかにもいろいろテレビに出演しているが、視聴者の反応について尋ねてみた。

リスポンス早いのは親戚、縁者からすぐ電話がかかってくる。「お前、出とったなあ」とか。（笑い）ただそれだけ。「じゃ、鬼買ってよ」という話なんだけど…。まあ、ずっとね、広くあれすればどっかで購買につながっとる部分はひょっとしたらあるかもしれないけど。ま、とにかく、ま、その、ほっといたらもう埋もれってちゃうもんじゃないですか。だけど、それを何とか、こう、ねえ、少しでもいろんなところへ露出して、鬼瓦の存在を、あのー、こう、露出して見といてもらわないと。

あのー、メディアがどうのこうのもあるけど、要するに川崎さんも最近はいろいろたくさん仕事やっとるけど、僕ら、まあ、その実績がものを言う。それしか測る尺度がないもんで。今から形のないものを作るだもんで、それに対してあーだ、こーだはねえ、無いもんで。今まで何やってきたかを見てもらうしかないもんで…。

## まとめ

2020年のアメリカフォークロア学会全米大会のテーマは「Re-centering the periphery」である。そのテーマ「周縁の再中心化」を新・鬼師の世界の中に探りを入れて考察してみた。もともとは「鬼師と鬼瓦」がつくる関係を「日蔭と日向」として対比で捉えていた。「鬼師」を知る日本人は一般的にはほとんどいないといっても過言ではない。ところが「鬼瓦」は日本人なら誰でもが知っている存在である。しかし、私が鬼師の

世界を調査し始めた頃（1998）からすでに日向の鬼瓦にさえ、陰が差し始めていた。その頃はそうした事に気づく余裕はなかった。しかし、現在（2020）は元号が平成から令和（2年）に替わり、さらにCOVID-19による世界的な伝染病の広がりにより、社会全体が大幅に質的に変容してしまっている。それも陰として広がっている現在進行形の状態である。鬼瓦の陰の進行は早い。一般の人々はほとんど意識していないと思うが、鬼瓦は陰に入り始めると、屋根から鬼瓦が消えて行く。日本という世界で最も古い生きた伝統を伝えている社会から鬼瓦が消えつつある。こうした現状を踏まえての今回の調査である。

陰があれば陽もあり。鬼瓦は屋根の上から消えつつあるが、鬼瓦の陰は影となり、メディアという現代技術によって消えたはずの鬼がイメージ（影像）となり、家屋の中に住む人々の生活空間に鬼瓦とそれを作る鬼師とともに、周縁（日陰）から中央（日向）へと、陰極まって陽の譬えのように極移動が起きている。特にマスメディアの代表でもあるテレビ局からの鬼師への取材並びにテレビでの放映は消えた鬼瓦を人々の心に蘇らせている。テレビでの鬼瓦は「鬼」の具象化であり、文字通り黄泉（よみ）帰りつつあると言える。

亮治のケースで見えて来たことがある。NHK全国版の「新日本紀行」や「日本風土記」などでは一般の人々からの反応はほとんどなかった。ところが、地元に瓦文化・鬼瓦文化が今も息づいていることころはその土地の教育委員会が中心となり、積極的に地域伝統産業の活性化を目指し、市民への鬼師／鬼瓦の喚起を一歩一歩行っている。周縁の再中心化が進んでいるのだ。それも中心（行政並びにマスメディア）主導で行われている。これは秋彦のケースにも同じことが言える。地元のテレビ局が町のイベント（鬼みち祭りや飾り瓦コンクールなど）を毎年取材し、放映している。さらには鬼師が学校へ講師として技術指導にさえ行っている。一般市民の間に地元の共通伝統文化が存在していると、メディアのその映像化によって心理的距離が一気に縮まって行く。伝統文化の意識化が始まる。再中心化である。

NHKなどの全国放送の場合は基本的には視聴者からの反応はほとんどない。鬼師のもとに反応は届かない。しかし、秋彦が語ったNHK「あさイチ」の生中継のケースは意味するところが大きい。わずか5、6分の鬼師／鬼瓦のテレビ中継で、番組が終わるや、鬼十の電話は鳴り続けたのである。もともと鬼瓦は日向にあった。その鬼瓦が現代では市中から消えかかっており、それまで日陰にいて表に現れることのなかった鬼師が、逆にテレビに現れたのだ。鬼瓦の古い記憶が人々の心に呼び覚まされても不思議ではない。電話が鳴り響くように。全国版のテレビ放送の場合、リスポンスがないのは鬼師の個人情報が画面に出ないからである。鬼師への接続コードがないので、視聴者は連絡を取りたくても、連絡を取る術がない。

それでも鬼瓦の記憶をひたすら呼び覚ますしかない。鬼師／鬼瓦はメディアを通して再中心化しつつある。梶川亮治はテレビに取り上げられることを次のように言う。

> 一つは絶好のチャンスだと。鬼瓦を知っていただくね、絶好のチャンスだと思います。

服部秋彦も亮治と同様のことを述べている。

> 少しでもいろんなところへ露出して、鬼瓦の存在を…。あのー、こう、露出して見といてもらわないと。

周縁から中心へ再び返り咲く道が出来上がりつつある。その一つの道がマスメディアによる鬼師／鬼瓦の取材、映像化、各テレビ局

での放映なのである。

## 参考文献

・高原　隆　2020 年「新・鬼師の世界 ― 伝統の変容：現代技術と伝統技術のインターフェイス―」 愛知大学綜合郷土研究所紀要　第 65 輯：25 － 41
・高原　隆　2017 年 『鬼師の世界』 あるむ
・高原　隆　2010 年 『鬼板師　日本の景観を創る人々』 あるむ